



イフパット だより

～農民参加なくして農業なし～

第28号

イフパット会員と国際協力・交流の経験



SENACSAブルセラ病科スタッフと西野シニアボランティア

「パラグアイ共和国における牛ブルセラ病診断について」から

目次

- | | | |
|-----|--------------------------|-------|
| ・P1 | パラグアイ共和国における牛ブルセラ病診断について | 西野 重雄 |
| ・P3 | 国際協力の周辺で過ごした30年 | 斉藤 英毅 |
| ・P5 | 国際交流余話 | 伊藤 信孝 |

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

パラグアイ共和国における牛ブルセラ病診断 について

会員 西野 重雄
元JICAシニア海外ボランティア
(獣医・衛生)

筆者は、2016年6月からJICAシニア海外ボランティアとしてパラグアイ共和国の国立家畜品質・衛生機構（以下SENACSAと記す。）の牛ブルセラ病科に2年間派遣されていました。主なる活動は、牛ブルセラ病診断液の製造と同疾病の診断です。

パラグアイは農業立国で、その中でも畜産業は国の基幹産業の一つであります。その畜産業が世界的競争に負けないう下支えをしているのが、私の配属先のSENACSAです。パラグアイには多くの家畜伝染病がありそれらを撲滅するために疾病浸潤状況調査を実施し、陽性家畜の淘汰を進め撲滅を図っています。その一つが牛ブルセラ病です。この疾病は牛の流産を起こしその生産性を低下させ、更に人にも感染する人獣共通感染症の一つでもあります。この疾病の診断液を作成している検査部にいます。診断液の製造のみならず、送付材料からのブルセラ菌分離も行っております。

今回はその診断液の製造について、簡単に説明することとします。ブルセラ アポルタス菌1119-3株という種菌を大量培養して、菌を不活化しローズベンガル色素で染色し、ローズベンガル急速凝集反応診断液を作成します。この診断液と牛血清を混釈すると粒状凝集塊が出現した場合、陽性と判断します。これは一つの牛ブルセラ病のスクリーニングテストで、陽性牛と決めるためには、試験管凝集法、エライザ法等の検査を進める必要があります。

牛のブルセラ病に感染すると、牛は妊娠しても流産を引き起こしその生産性を低下させ、またその流



写真2: ジャガイモ培地



写真3: 種菌を接種します。



写真4: 菌を不活化し回収を行います。



写真5: 遠心を繰り返したうえ、pHを調整し色素をつけます。



写真6: 最後に瓶詰めをします。



写真7: 平板凝集反応（ブルセラ病診断）にて凝集塊が観察された例が陽性です。

備考: 写真は解りやすくするために途中過程を省略しています。

産胎児から他の牛に感染した人が感染したりします。乳牛であれば乳汁に菌が排出され、生乳摂取により人が感染します。牛が感染した場合は、法令に基づき淘汰処分されます。人に感染した場合は、高熱を伴う熱性疾患で抗生物質による長期治療が必要となります。日本における牛ブルセラ病は近年までは発生が認められていましたが、現在発生例はありません。人の例では、海外で感染し日本で発症する例があります。このように畜産業のみならず公衆衛生上の観点からも重要な疾病と位置づけられています。

パラグアイは牛肉輸出にあつては世界第6位にあり、家畜衛生状況を向上し更なる輸出を図ろうとしています。しかしまだアルゼンチン、ブラジルのような技術進展が図られてなく国際支援を受けながら進展しているところです。パラグアイ牛肉の日本向け輸出について手続き中と聞いており今後、益々家畜衛生分野での日本との関連が、国際協力等を通じ益々深くなることが期待されます。



写真1: ジャガイモから、種々の試薬を加えブルセラ培養のジャガイモ培地を作成します。

『国際協力の周辺で過ごした30年』

会員 齊藤英毅
(有限会社エクシディア)

本年8月5日、私は約一年半ぶりに日本を離れた。向かった先はスリランカのジャフナ。コロナ禍で中断していた酪農案件の渡航が再開したのである。現地の感染者数の増加も収まったことより、陰性の検査結果、二回のワクチン、そして既定の隔離期間を設けることで渡航に係る合意が成立したのだ。先発隊が6月末、私は後発で現地入りした。7月は農家への立入りも開始し、本格的な再開が実ったかに見えた。ところが、8月第二週から形勢は逆転し丁度私の隔離明けを待つかのようにロックダウン状態に戻ってしまったのである。この規模の流行は一世紀前のスペイン風邪以来だという。つまり、ほとんどの人にとって初めての事態なのだ。昨年来ずっと体験してきた、相次ぐ行事のキャンセル、そして「非日常」が日常化したことを思えば、私の活動予定の取り止めなど、取るに足らないことだ。



写真:ロックダウンのジャフナの町を聖牛が闊歩

イフパット事務局から「海外での活動」に関する原稿の依頼が届いたのは丁度そんな時期であった。さて自分に何が書けるのかと、これまでの活動を振り返ったところ、ちょうど今年が「30年目」であったことに気づいた。起算は、JOCVの獣医師隊員として日本を出た1991年の夏からである。むろん、「国際協力に貢献したい」といったような崇高な意志は、当時の私には――あるいは今でも――しっかりと宿っていないのかもしれない。しかし、「色々な国々の畜産農家に出入りできる仕事に就きたい」とでもいった意識は出来上がっていたと感じている。ともあれ、「国際協力」と呼ばれる世界が私の中に宿り始めたのはこの時からである。

実は私は、野生動物が好きで、もともと動物園の獣医を目指し、大学卒業当時に拡充していた砒部動物園を希望しながら愛媛県職員になったのである。ところが世の中は計算通りにいく訳はなく、私の配属先は愛媛の中でも最も奥深い宇和島の家畜保健衛生所勤務となり、畜産農家の巡回が主な業務となった。しかしこの計算違いのおかげで、私は数々の素晴らしい畜産農家の佇まいと接することになる。あの当時の宇和島の山奥には、今の日本ではまず見られない竹囲いの豚等、伝統的な農法がまだ見られたのである。他方、動物園への転勤は難しいことが明らかとなったことより、かねてから興味と不安の混ざった思いで眺めていた協力隊応募を現実のものとし、パラグアイという、まったく知らない国に行くことが決定した。それが1991年の春であり事前研修を経て、夏には現地入りとなった。学生時代、海外の牧場で実習したことがあったので、どうかなるような勝手な思い込みがあったのである。しかし、まったくの別世界であった。言葉はもとより、畜産獣医に関する専門であるはずの知識や経験もまったく役に立たなかった。しかし、ここでもまた、圧倒的な存在感で人と家畜が共存している農村風景に出会い、その情景に心躍り、結局、その情景見たさにこの世界に居残りを決め込んだような気がしている。あの農村の風景に描き出される調和感には、持続的農業を可能にする様々な要素が含まれていると今でも感じている。

ともあれ、居残るには芸がいる。専門芸はもとより、語学、話芸、さらに腹芸等々、幾つもの芸が必要だ。ところが私にはそのいずれもなかった。にもかかわらず、協力隊の経験しかない私がすぐに専門家としてパラグアイに再赴任することが出来たのは、ひとえに時代のせいだろうと思っている。その頃までは、獣医畜産系の場合、専門家と呼ばれる方々の多くは大学か省庁の研究機関の技術者であり、いわゆる拠点型の技術プロジェクトで活躍されていた。対象国側も同じく大学や研究機関に属す技師がカウンターパートであり、まさしく技術移転そのものの環境だった。そういった流れの中であって、今では極めて一般的と言える農民参加型のプロジェクトが畜産案件の中でも少しずつ散見され始めたのである。私が派遣されたパラグアイ農業総合試験場はその名の通り農業の試験場であり、その当時、中南米で目ざ

れていた不耕起栽培をテーマとする研究に取り組んでいた。牽引役は、現イフパット理事の永井和夫場長である。ところが私の主な業務は、試験研究ではなく農場周辺に点在する小規模畜産農家の組織化を介した畜産技術指導だったのだ。この業務に関しては、同じくパラグアイの田園で、農家への人工授精の普及のために過ごしたJOCV時代の経験がそのまま役に立った。よって、きわめて恵まれた境遇であったと言ってもよい。しかし逆に言えば、芸を覚えずに過ごせる期間をまたも重ねてしまったのである。小規模農家との関係構築に関しては、この時の経験が今でも役立っていることを感じている。しかし、肝心の専門芸に関しては明らかに手薄なことを体感しながらの任期終了となった。

そこで選んだ道は、実にありきたりだが、大学院だった。私には海外の大学院に進学できるような財力も語学力もなかったため国内の大学院を探した。学費は、育英会と畜産技術協会という二つの団体の奨学金を借り受けた。この時期、協会には農水OB、そして元JICA専門員の緒方宗雄氏が参与で居られ、私のような所属先のない獣医師隊員OBを集め、いろいろな指針を与えてくれたのである。私が協会の奨学金を得ることが出来たのも緒方参与のお陰である。時代の流れもさることながら、どんな人に逢えるかという点も併せて大きいと改めて感じる。さて、大学院に戻った私の生活は決して順風満帆ではなかった。所属先もなく、すでに妻子があった私にとって、丸四年間、無収入で過ごすということ、海外の業務は一切なくなることに、そして何より、馴染みのなかった「生理学」を改めて学び且つ論文を仕上げるという生活は、覚悟はしていたものの、想像以上に窮することが多かった。しかし、どうにか、本当にどうにか修了まで漕ぎつけることができた。ところが私は驚くほど無芸のままだった。でも不思議なもので、区切りがつき開き直った気分にもなれたのかもしれない。無芸であることが気にならなくなったのである。そしてさらに幸運であったのは、修了と同時にパナマの畜産案件に「畜産技術普及」の専門家として派遣が決まったことである。このお膳立ては、緒方参与の後に協会に常務として着任された同じく農水OBの藤田陽偉氏によるものである。藤田常務もFAO本部勤務を含め、海外経験が豊富な大先輩で、私を含め、薫陶を受けた後進の獣医師は多い。

その後は、パナマ案件で得た職種である「畜産技術普及」が私の生涯のテーマに変貌したと言ってもよく、小規模畜産農家への「適正技術」とそれを普及するための「伝達手法」を気にしながら過ごすようになった。具体的には、「何を運ぶか？」という点と「どうやって運ぶか？」という点である。周知のごとく、多くの開発途上国では農業普及は公共機関によって統括されており、予算も少なく農家のカバー率は概して低い。そういった中、推進してきたのは「必要最低限の技術をなるべく多くの農家に」という概念である。このコンセプトに基づき、パナマに続

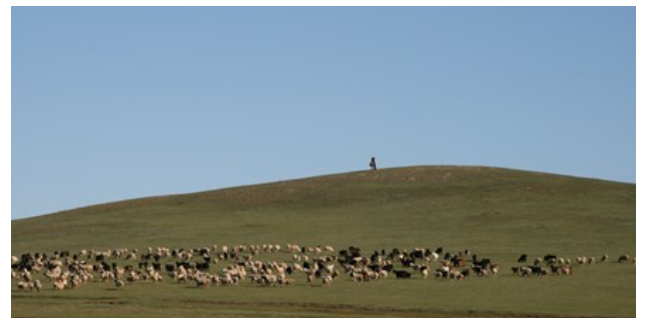


写真:モンゴルの草原と畜群は海と魚群のようだ



写真:水牛の背に乗るミンダナオ



写真:Bedouinの人々にとって家畜はまさに蓄財

いてボリビア、スリランカ、ウガンダ、そしてフィリピンでも同様の仕事に従事した。また、調査で関わったモンゴルやパレスチナでもこの観点から普及手法の改善案を示してきた。この概念は、農業系の普及に関わっている方々には当たり前に響くかもしれない。しかし、畜産領域では、獣医診療や人工授精など、個別訪問が基盤となる作業も多く、しかもこう

いった農家サービスと普及業務が区別なく扱われてしまっている嫌いも強い。さらに獣医師や人工授精師の中には「普及は我々の業務ではない」という認識を持っている人も少なくない。よって、特に畜産技術者の場合、複数の農家をグループとして捉え、如何に効率よい普及業務を推進するかという点の再認識は非常に重要なのである。私にとってこの点は最重要項目であり、確信を持って活動してきた。ところが、この確信をどうにも変更せざるを得ない状況になったのがまさしく現在のコロナ禍なのである。個人よりも集団というMass-extensionの概念はまさしく感染拡大の下地となるクラスターを形成してしまうのである。よって、当面は人を集めることなく集団効果を持ち得る方策作りに知恵を絞らなければならず、この点が現在の私の最大の課題である。

以上、とりとめもなく記したが、最後に此处数年の間で最も返答に窮した質問を紹介して結びとしたい。それはとある専門家会合の後の懇親会であった。その日も私は過ごした国の経験も示しながら適正技術に関する発表をした。質問は日本の某省庁の生え抜きの方からである。曰く、「JICAは『日本の技術や経験を世界に…』』と思っていたのですが、例えば齊藤さんの技術や経験の場合、これは日本のものではないですよね」というものである。付言するが、この問いかけには揶揄の響きはまったくなかった。他意はない素直な質問なのである。私は茫然とし、ちゃんとした回答はできなかった。諷められたような気分にもなった。今でも首を竦めるような思いが残っている。ただ、もしまた同じ質問をされたならば「確かにその通りです。でも私という爪先から頭のてっぺんまで日本製の者が、心底納得しているものを伝えれば、どこか必ずNipponになっているはずです。地味でもモノ作りに長けたNipponの遣り方と無関係じゃないはずです」と答えようと待ち構えている。(了)

現代の大学が、拠点大学と言われる為に必要なキーワードは「国際化」と「研究大学」である。少子化に伴い大学によっては定員割れをする大学もある。いずれ大きな大学との統合、合併、吸収という事態も生じている。かつては有名大学を目指すのが普通であったが、いまでは学部は普通の大学、大学院で有名大学に移ると言う学歴ロンダリングが新たな方法でもある。国際化には相手国との相互理解、相互友好を進めるために言語の修得が重要である。世界共通語としてエスペラント語が注目されたが、やはり英語である。何故英語かと言えば、かつての植民地の多くが英国の管轄にあり、その名残りである。大学の学部で「海外移住」という講義があり、筆者は南米での農業を夢見たが、一人息子と言うことで両親、親戚からも猛反対を喰い、諦めたが、その時の講義内容はポルトガル語で、履修申告者は50名を超えていたが回を重ねる毎に減り、期末試験を受けたのは筆者一人であった。もともと語学には興味があったからスペイン語にも手を出した。

三重県の伊勢志摩は有名な観光地で、多くの外国人観光客が訪れる。大学までの通学は蒸気機関車で1等、2等の区別があり、観光客は1等車に乗っていた。伊勢志摩訪問後は京都へ移動するから1等車に行けば必ず外国人観光客に逢える。亀山から津までのわずか20分だが、殆ど毎日この時間を英会話に利用した。大学では聖書研究会（バイブルクラス）と言う日英対比の新約聖書を教材に基督教の普及と英語を無料で教えてくれる集いにも参加したが、自宅の近所にカトリック教会ができ、毎日曜のミサでカトリックを、さらにもう一日は英会話と言う事で通った。大学3年時に米国派遣研修が地方のテレビ局からオファーされ、応募したが大学での英語の成績が悪く不合格。ならば英語の成績を上げてからと言う事で、もう3科目の英語の講義を受講し、2科目は成績向上の目的達成の為に猛勉強し、他の1科目は実力試しに、殆ど勉強せず期末試験に臨ん



だ。結果は10点満点で2科目が9、1科目が8で英語全体の評価を上げることができた。再度海外派遣に挑戦を試み50日間の米国研修旅行を手にした。愛知、岐阜、三重の3県の大学、高専に在籍する応募者から10名が選考されその一員となった。この経験は貴重で、それ以後の筆者の国際交流に関し、教育研究面で大きな収穫となった。この事業参加への大事なことは「行きたい、行ってみたい」と言う高いモチベーションであり、失敗しても希望を叶えるために再挑戦する強固で熱い「意思または情熱」を堅持することである。英語は一般教養で学部2年末で終わる。3年になってから余分に3科目も英語の講義を履修するのは希であろう。それも結果が悪ければ、英語の最終的な成績評価も下がる危険性もあった。でも筆者はそれに敢えて挑戦し、好結果を得た。東京の羽田からハワイを経由し、米国の独立記念日の7月4日にユタ州のソールト・レイク・シティに到着、約3週間のユタ大学でのセミナーやイベントに参加し、残りの30日を2台のステーションワゴンで米国各地を訪ねると言う長期の旅である。2班に分かれユタ大学が用意した2台の車に分乗、運転手はユタ大学が選んだ学生である。訪問先では歓迎レセプションや各種イベントがあり、その都度身につける服装は公式な服装では上下揃いのスーツ、黒色の革靴、ネクタイでの参加であり、さもないとカジュアルな服装と言う事になる。夕食会などではスピーチを求められるが、「あいうえお」順で指名が回ってくる。筆者の場合最初で戸惑った。そこで学んだことは、「このような場合にはどの様な内容のことをいえばよいか予め考え準備しておくこと」である。司会者が「何か言うことはありますか」と言われても「何を言うべきか」が分からないと場がしらける。「このような場合は、どの様なことを言えば良い」と分かると安心感に余裕が加わり、自信も付く。慣れてくると冗談も入れる余裕さえ出てくる。流石にこの時代での筆者はそれほどの能力は無かったが、後に海外研修員への講義では「インターナショナル・ジョーク」として講義の合間に眠気覚ましにいくらかを紹介する余裕も出てきたが。そこでこうした夕食会やイベントに参加した後、必ずやっておくべき事は「はがき1枚」で良いから「サンキュー・カード」を出して置くことである。最近では論文や資料を送付、連絡しても返事が来ることは殆ど無い。筆者の偏った考えかも知れないが、「返事や

応答がない」ことは、送付物や連絡内容に「興味や関心が無い」事に通じる。相手が興味を持たないものを敢えて送ることもないと言う事で、次の送付を躊躇するが、タイの学生教員を問わず応答する人は極めて少ない。余程親密でその必要性がある場合を除き。相手からの返信返答は先ず期待できない。このような振る舞いはタイ人に限らず、最近では日本人の多くも同列である。食事を共にし、カラオケで意気投合したかに見えても、その後一緒に撮った写真を送っても「梨のつづて」が最近の日本人を含む多数の挙動である。「頼みもしないのに、勝手に送ってきて返事を要求するとは無礼な」とでも思われているのかも知れない。あるいは「その時はその時で、過ぎた後は関係ない(?)」という事かも知れない。またそうした「反応をすること自体必要ない」と言うのかも知れない。国際学会も学術論文発表も大事だが、筆者はそれ以上に国際マナーや国際常識を学ぶ機会とも理解している。

文化や伝統、生活、習慣の異なる多様な人種が如何に協調して「ひとつの宇宙船地球号」と言う船に呉越同舟して行くかと言う視点は重要である。これまでも同種の国際交流では、論文発表最優先は良いが、発表が終わると直ぐに観光に出かけたり、事務やスタッフに至っては英語ができないから相手大学を知るために通訳を用意してくれと言い、通訳が来るのが遅いと、「それじゃあ、私達は市内観光にでも行って来ます」などと恥ずかしい事を平気で言う挙動が見られた。学生達は英語で論文発表をしているのに、事務やスタッフはこのレベルであった。事務職員の海外研修事業については本NPOのホームページの「会員の活動」を参照されたい。国際交流に限らず、何事をするにもモチベーションの高さが全てに優先する。このモチベーションは図1に示す数式の「E: Enthusiasm」にあたる。すなわち図における「D」はデザインで機械の設計を意味する。また「I」は情報 (Information)、「J」は判断、意思決定を、また「K」は知識 (Knowledge)、を意味する。また「E」は (I・J・K) のべき乗を意味する。この数式の持つ意味は次の様である。すなわち何かを設計するには、まず情報「I」を集め、設計するものについての知識「K」がなければならない。その上で最終的に、ど

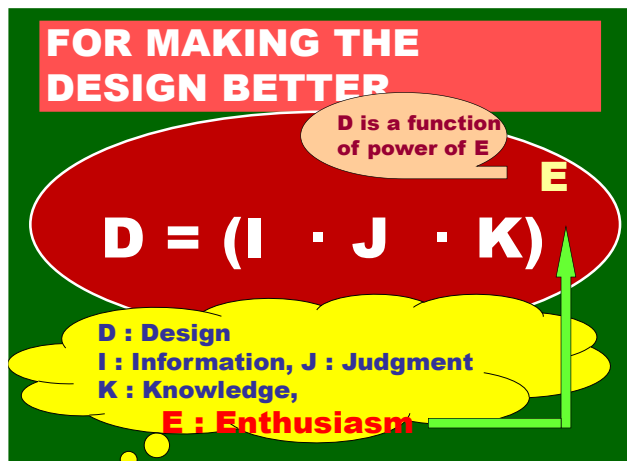


図1 設計の数式概念

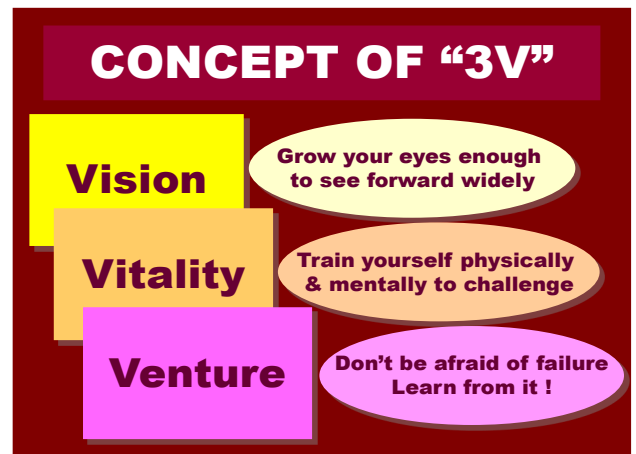


図2 3Vの意味と概念

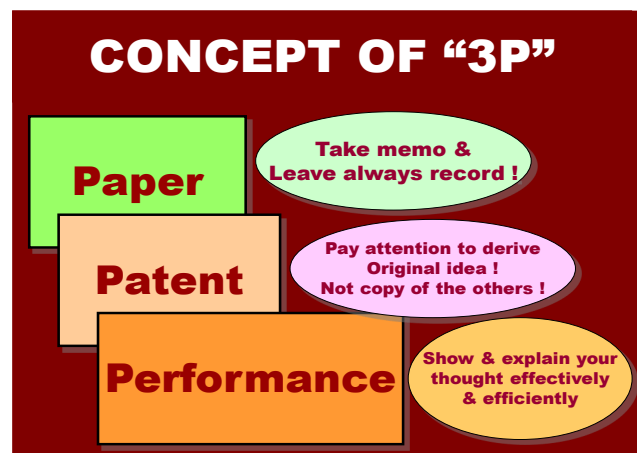


図3 3Pの意味と概念

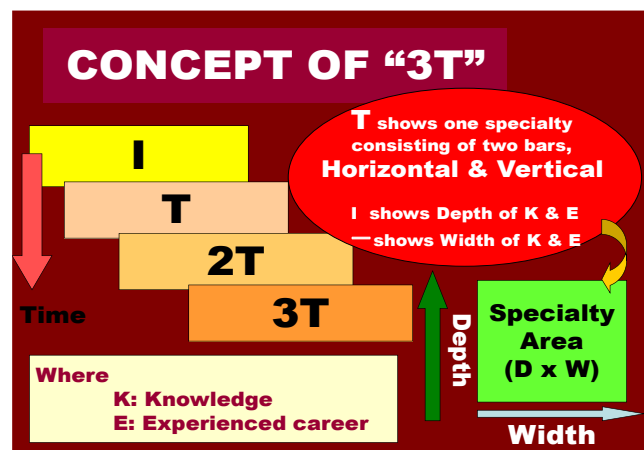


図4 3Tの意味と概念

に、どうするのかという判断または意思決定「J」が成される。しかし、いくらこの3つ（I・J・K）があっても、良き設計をしたい、設計を最高のものになりたいと言う高いモチベーション、情熱がなければ全く意味を持たないという意味である。この数式は機械の設計でなくても人生設計であっても同じである。好きな相手が見つかり、将来結婚したいと言う場合にも、相手の情報を集め、結婚とは何かと言う知識を有し、結婚に至るかどうかの判断または決心に至る。これが（I・J・K）であるが相互に愛情「E」が無ければ全く意味はない。この値が大きいほど実のある人生設計になると解釈できる。ではモチベーションを高めるにはどのような意識を堅持すべきかとなると、次のように考える。3 V (Vision, Vitality, Venture)、3 P (Paper, Patent, Performance)、3 T (T, TT, TTT)がそれぞれである。図2～図4を用いて説明する。常に何事にも「興味を持つ」ことが重要で「無関心」が最大の障碍であり、それには常に「何の為に、誰の為に」と言う目的意識を確認する姿勢が必要である。3 VのVision は広い視野を持ちVitalityは何事にもくじけない意気込みをそなえ、Ventureは何事もなく立ち向かえという意味である。3 Pの Paper は研究論文を読み、また書くこと、Patent はアイデアを守る知的所有権の取得、Performanceはいくら優れた内容でも他人にわかりやすく説明できる能力、あるいは方法、技能を意味する。3 TのTの字の上の横棒が知識の広さ、縦の棒が知識の深さを示す。かつて専門家とかプロフェッショナルと言われる人はひとつの専門知識を誰よりも深く知っている人を指したが、学祭的知識の必要性が高まり、ひとつの専門領域ではな

く、2つ、3つに広げ、しかも時代の技術革新に対応する、できる技術者を専門家と言う時代になった事を意味する。（以下に最近Best Paper Awardを頂いた論文を参照下さい）。https://drive.google.com/file/d/1Fx_ZMvJ9M7Wc0m0BuOujrL5opB9_o0yV/view?usp=sharing

若者に告ぐ！ 国際人を志すならば常に世の中の動きに「注視」する姿勢が必要で特に新技術とその革新、世界諸国の動きに敏感である必要がある。目的が明確になると自分のミッションを意識し、まず

は量的結果を継続的に出すことが成果の質を高めることになる。

語学的重要性！ 筆者はタイに滞在しつつもタイ語は全くできない。そんな筆者が言うのは厚かましいがアジアに住むなら英語、中国語ができれば頼もしい。新技術は開発した国が自ら進んで新技術を他国語で紹介する事は少ない。筆者は大学時代、ソ連（当時）が世界に先駆けてロケット打ち上げに成功し、飛行士やライカ犬も搭乗していたと言うニュースに驚嘆し、ロシア語の必要性を感じた。当時ロシア語は珍しく教育TVでの放映程度であった。しかしその必要性和重要性を意識し、独学で臨んだ。米ソの宇宙競争も終わり、その熱い競争は冷めたが、ロシア語の月間学術誌「トラクタと農業機械」の抄録翻訳を続け、その後のNPOでの中央アジア研修員への講義にも役だった。他の言語と異なり抄録で頂く謝金も多く、新技術への知識獲得、学術情報収集に大変良かった。またJST(Japan Science & Technology)の前身であるJICST(Japan Information Center for Science & Technology)からも長年（約10年余）の抄録翻訳貢献に対し感謝状を頂いた。記して謝意を表する。

国際交流に対する筆者の姿勢！ 年代こそ異なるが筆者の誕生日は国連の創立記念日なので、いつの間にか国際的な貢献ができればと考えてきた。筆者が考える国際貢献は次の様である。

1) 自分の働き口は自分で探す。2) 採用先からの報酬以外は基本的に無償で協力する。3) モチベーションが高く、やる気のある人材には積極的に支援する。4) 真剣に本気に対応する、5) 自分の専門並びに専門に近い学術関係国際会議には積極的に参加する。6) また異なる分野にも積極的に参加して、後に続く後輩への雇用機会を創成するべく努力する。7) 参加する限りは必ずフルペーパーを投稿する。8) イベント参加の報告は報告書の形で広く公表する。8) 農業を中心とする教育、研究を通じてアジア及び世界に貢献する。9) 貢献活動に際しては公を優先51%、私は49%を旨とする。

最近の学生に対する筆者感！ 日本、アジアに限らず筆者が見る限り最近の学生はモチベーション

が極めて低い。無関心、礼儀（エチケットやマナー）に欠ける。ステイ・ハングリーでない上に、積極的本気が見えない。連絡に対し無反応。学生からの積極的コンタクトがない。ハウレンソウ（報告・連絡・相談）教育が成されていない。

国際交流活動に於けるスタンス！ 個人的には問題に責任を取ることができ、マインドのある人間性（Humanity、Personality）を有し、組織では100%の相互信頼(Mutual Liability)を創成できる指導力を持つべく努力する。

NPO便り第28号に寄せて

編集文責：永井 和夫

第28号は2名のNPOイフパット会員と伊藤信孝理事に投稿をお願いしました。今までの国際協力・交流の経験から何か、と言うことで。

西野さんは私（永井）がボリビアのJICA事務所に勤務していたとき、JICA専門家としてラパスにおられました。斉藤さんは私が勤務したパラグアイの農業試験場の畜産専門家です。お二人とも、その後も継続して国際協力の事業・活動に参加し活躍されています。

伊藤理事は、NPOイフパット設立当時から近年まで会長をお願いしました。特に、当NPOが長年受託してきたJICAの農業機械研修コースの運営実施には特に深く関わっていただきました。大学をお辞めになると請われてタイの大学に行かれ、現在もコンケン大学において客員教授として研究教育に貢献されております。

イフパットの活動だけではなく、会員の皆様の経験やご意見を、今後とも機会を見てイフパットだよりに掲載したいと考えています。勿論、底に流れる考えは「農民参加なくして農業なし」ですが。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL：029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>